

砂漠に消えた長城

敦煌に着いた翌朝、まだ暗いなかを鳴沙山にむかう。入り口の門番を起こして中に入ると、厩舎から観光用のラクダが出て来るところだった。足に結んだ駝鈴の音が夜明けの到来を告げているようだ。砂山の稜線に朝日が当たり、モノクロームの雄姿がゆっくりとあらわれる。昨晚の風で人の足跡が吹き消された砂漠に踏み込むと、靴底を隔てた砂がキュッ、キュッと鳴くのが聞こえる。古人がここを鳴沙山と名付けた所以である。



鳴沙山：嘉峪关からゴビを走ること10時間、砂漠の果てに自然がつくりあげた砂山の偉容があり、その砂は莫高窟の屋根を形成している



玉門関：砂嵐の砂漠に忽然と姿を現した古代駐屯地の大門、西域防衛の拠点だった。魔鬼城、河倉城（食料倉庫）、漢代長城の観光はここを基点とする

メインストリートの陽関東路にある敦煌市博物館の2階には、遼寧省の丹東から敦煌西郊120キロの玉門関までつづく万里の長城のジオラマが展示されていた。学芸員の説明によれば、歴代長城の総延長は1万2500キロに達するといふ。その長大な模型をながめていると、遼寧省部分以外の道程を3カ月かけて踏破してきたのだ、という実

感か湧いてきた。街はずれにある沙州（敦煌）故城の城壁や白馬塔を見てまわる。白馬塔の「白馬」とは、いま新疆ウイグル自治区で庫車とよばれる都市周辺に興った亀茲国の高僧が経典を背負わせた馬のことを指しているらしい。その高僧の名は鳩摩羅什で、信心深い敦煌の篤志家が重い経典を運ぶ苦行に疲労死した白馬を悼んで塔を建立したのだという。白塔が藍天に映えて美しい。

昨日手配した車で砂漠を疾走している。フロントガラスには、ピシッ、ピシッと小石が飛んできて、蜘蛛の巣のようなひび割れが少しずつ大きくなる。

えるのだ。他都市からの交通の便も良くなり、数年前に敦煌と嘉峪関の鉄路が開通して両都市が6時間で結ばれたので、沿海地方の富裕層を主体とする国内の観光客が激増しつつある。敦煌は昨日までいた嘉峪関市より西域の少数民族が多いが、ウルムチやトルファンよりは漢族の色彩が濃厚である。長距離バスセンターや郊外の道路標識にはゴルムドなど青海省からチベットへ通じる都市の名称が散見され、往時ここが西域における漢族とチベット族やその他の周辺民族との接点であったことがうかがえる。

午後には鳴沙山を屋根に戴く莫高窟に行った。入り口付近に広大な駐車場が整備され、窟の間には長い鉄柵がめぐらされて味気ない。30年前にこんなものはなかった。中国人の国内旅行ツアーに紛れ込んでガイドの説明を聞く。一人旅にはこの方法が便利だ。

市内にもどり、夜市をひやかす。日本人を始めとする外国人観光客が多いので、千仏洞の窟内を彩る飛天の複製画や工芸品などを売る店が大半を占めている。屋台の料理はここもウルムチやトルファンなどと同じように、羊肉を中心としたエスニックなメニューが多い。この旅の最初からそうだったように、今晚もまた路上の料理に舌鼓を打つ。明日は敦煌の西郊外120キロにある漢代長城を訪ねる。

砂漠に消える長城

西湖長城は漢代に築かれた。ゴビを東西に横切ってロプノール方面に延び、魔鬼城を越えてタクラマカン砂漠に消える



西湖長城

すっかり明けた鳴沙山を後にして、敦煌と柳園の途中にある西湖長城へむかう。柳園は蘭新鉄路から敦煌へむかうとき下車する駅だ。砂漠を北行する国道215号線を1時間ほど走ると、左手に長城の遺構が見えてきた。渤海の山海関からたどってきた明代の長城は嘉峪関で終り、そこからさらに漢代の長城が西にむかつて断続的につづく。西湖長城はその一区間を成しているらしい。とつぜん眼前に現れた長城は国道を東から西に突っ切り、ラクダ草の生えるゴビをのた打って、玉門関を通りタクラマカン砂漠のロプノール方面に進路をとる。数キロ北には疏勒河が並走しているはずだ。城壁の高さや厚さを計って、市内にもどる。

敦煌市内

およそ30年ぶりに訪れた敦煌で、むかしの街並みをさがすのは難しい。埃っぽかった街路はみごとに現代化し、ホテルには日本食レストランがあり、夜の酒場では日本語のカラオケさえ歌



莫高窟の2400体の仏像は小さなオアシスに護られる



敦煌市のメインストリートに踊る飛天



夜市は庶民の娯楽場である



沙州故城に位置する白馬塔



雅丹地質公園（魔鬼城）に散在する風化土堆群のひとつ。砂漠に堆積した土が強風で削られ、塔のような形になった

砂嵐が窓外で吹き荒れている。前世紀の初頭、ヘーデンやスタイン、あるいは大谷探検隊の橋瑞超らもラクダで踏査したゴビの西南地帯である。

玉門関は大きな烽火台のような形をした土の構造物だ。四面に穴が穿たれ、ここが外敵から軍隊の駐屯地を守る大門であったことがわかる。青い粗末な看板が立ち、玉門関を中心に漢代長城や河倉城（食料倉庫）の遺構、雅丹地質公園の位置関係を教えてくれる。

まず、西に75キロほど離れた雅丹地質公園にむかう。ここは東西80キロ、南北が40キロもある広大な風化土堆群で、魔鬼城とも通称され、その恐ろしい名前が示すとおり強風が自然を削りつつくりあげた砂漠の廃都とでも表現

すべき驚観である。

雅丹地質公園から漢代長城に移動する。吹き荒れる砂塵の前方に見えてきたのは高さ3メートル、壁厚2メートルほどの典型的な土長城で、その姿はまるで砂漠にのた打つ巨龍のようだ。風化で起伏する長城の背が砂嵐のなかを西にむかつて驀進している。どこまで続いているのだろうか。巨龍の胴体は黄塵万丈のゴビに霞んで、その頭を視界にとらえることはできない。

旅の終りに

山海関からこの足でひとつひとつ歩いてきた長城の関や堡は、30カ所以上にのぼった。これだけ踏破しても、ま

だ点を線で結んだにすぎない。まさに、「万里の長城」なのである。

新疆ウイグル自治区の西の端、カシユガルの郊外にも烽火台があるらしい。烽火台は長城に並走して築かれ、白昼の狼煙や夜間の炎で外敵の襲来を伝えた通信設備だった。ゴビに消えた長城は、あるいは中国の西の国境カシユガルまで延びていたのかも知れない。歴史学や考古学が取り組むべき今後の研究課題であろう。

山海関から遼寧省を逆V字形に貫いて、朝鮮国境の丹東に到る長城がある。モンゴル高原に展開した韃靼および満州族など北方異民族世界と漢民族世界を分けたもので、明代の歴史地図はこれを「壕垣」と表記している。万里の長城が天下第一関と称される山海関から始まるとすれば、少なくとも明代において長城は西と東にむかう2本のルートが存在したことになる。吹き荒れる砂塵のなかで、漢代長城の遺構をながめながらまだ見ぬ遼寧の壕垣のことを想像すると、気持ちは遙か数千キロの東の彼方にとんでしまう。瞑想の世界から砂漠の現実にもどる。黄色い砂嵐のなかで、長城を行く旅の西方ルートがいま終わったことを知る。■



漢代長城。典型的な土長城。版築工法で突き固められた城壁の土中には、地質を強化するための植物繊維が多く含まれる